

平成29年度高梁市立学校再編推進審議会（第2回）会議録（概要版）

1. 招集 平成29年6月29日 午後3時00分
2. 開会 平成29年6月29日 午後3時00分
3. 閉会 平成29年6月29日 午後5時00分
4. 会議の場所 高梁市役所 3階大会議室1
5. 委員の出欠及び氏名

氏名	出欠の別
山部 正	出席
川本 雅子	欠席
肥田 吉教	出席
湯浅 真治	出席
植木 哲夫	出席
村上 鉄治	出席
三宅 忠篤	出席
川上 博司	出席
黒川 康司	出席
大川 和恵	欠席
仲元 稔明	出席
塩田 寿光	出席
中山 正浩	出席
松尾 志郎	出席
妹尾 芳訓	出席

6. 意見聴取のため会議に出席を求めた者の職氏名

職名	氏名
高梁市立宇治小学校長	関 孝之
高梁市立成羽中学校長	林 照雄

7. 事務局の出席者の職氏名

職　　名	氏　　名
教　　育　　長	小　田　幸　伸
教　　育　　次　　長	宮　本　健　二
教　　育　　総　　務　　課　　長	大　福　克　志
学　　校　　教　　育　　課　　長	張　谷　孝　文
教　　育　　総　　務　　課　　課　　長　　補　佐	西　川　優　子

8. 議事の内容

別紙会議議事要録のとおり

高梁市立学校再編推進審議会（第2回）議事要録概要

1. 開会

2. あいさつ（山部会長）

山陽新聞で連載されていた「しの時代へ」が終わりましたが、この記事を通して日本あるいは世界で活躍して、最終的にはUターンをして高梁に帰ってくれるような子供を育てなければならぬ。そのためには高梁が心の拠り所になるような教育をしていかなければならぬ。地域を永遠に継続するためには、そういう人材を育てる必要があると言うことを（新聞）記事は言おうとしていたのだと思う。地域が将来に向けて前進している姿が取り上げられていたと思う。（高梁市の）どの小学校中学校に行っても素晴らしい学校ばかりである。その学校をどうやって存続していくかが第一義である。守りながらも最終的に子供が少なくなって、学校をどうするか。未来に向かって高梁の教育はどうあるべきか皆さんと考えていきたい。

前回欠席委員の自己紹介

3. 議事

学校教育課長：小規模校のメリット・デメリットについて別添資料により説明

会長：文部科学省の資料なので、高梁市にあてはまるかどうかというところがある。法令では小中学校の標準学級数は12から18なので、高梁市は小規模になる。小規模のメリットを最大限生かしていくということに最終的には落ち着いていくことになると思う。今の説明に対して意見質問はないか。

委員：メリットは比較的実状であると思う。デメリットは工夫次第で克服できるものがあるのでないか。小規模校は比較的メリットの方が多くある。

委員：自分の時は統合など考えなくてよかつたが、子供にとっては統合の方が方向性として正しいと思う。子供の未来を考えるのがまず第一であろう。

委員：小規模校であるといじめがあった場合クラス替えが出来ないまま中学3年生までいくことになる。

中学生であれば、部活動のチーム編成が出来ず、種類に選択肢がない。

特色のある教育をして子供を増やすことを考えるべきである。

会長：いじめの構造は、ひどい時になると幼稚園からずっと続いてしまう。小規模校も統計的にはいじめが多いという問題もある。

委員：中井小から中学校へ進学すると人数が増えるのでよい面もあると思うが、いじめとかが発生した場合もある。

委員：子供を増やすことができればそれが一番よいと思う。特色があれば文化のまちならではの教育が出来ていけばよいのではないか。

会長：他に何かないか。

委員：諮問書に第2次高梁市教育振興基本計画というのがあるのだが、前回いただいた教育大綱と同じくらいのものであるか。

学校教育課長：第2次高梁市教育振興基本計画は、前回配付した教育大綱の内容を詳細にしたものである。

委員：それはいただけないのか。

会長：（事務局で）準備してほしい。

小規模校をどのように活かしていくかということを議論していきたい。

どうしたら特色ある学校になるかである。

委員：先ほど会長がメリットの最大化と言われたが、大規模なのか小規模なのか、その小規模で特色あるというのがかなり強めにあるのかないのか。

会長：私は小規模校のメリットを強めなければならないと思う。文部科学省の手引きを読むと原則とか基本的にはという言葉が多いが、学校をなくしたり再編することは地域のみんなが理解しなければならない。書いてあるのは、学校というのは地域の核、コミュニケーションの場であるということである。そういうものがなくなってよいのか悪いのか、教育と地域振興とが微妙に絡み合ってくるが、できるだけ地域のために残さなければならぬだろうと思う。それを残すためにはどうするか。子供が2人や3人となった場合の教育を一方では考えてやらなければならない。どのあたりまでどうなるのかというところであろうと思う。意見があればお願ひする。

委員：折り合いのつけどころが一番ということか。

会長：であると思う。地域も頑張ってもらわなければならない。学校も頑張ることだと思う。

委員：今までの流れでは子供が中心という発言が多くかったのではないかと思われる。

会長：子供の意見も当然聞いてやらなければならないし、地域、保護者にも聞くというようにやりなさいとこの手引きには書いてある。また読んでみて欲しい。

学校教育課長：高梁市の学校再編の経緯について別添資料により説明

会長：意見、感想、質問があるか。

委員：この前の議会でも統合の生徒数の基準を言われていたと思うが、それを見直すのかそのまま行くのか、この審議会で数字を出すのか。

会長：出すのかどうか事務局はどう考えるのか。

教育長：基本的な方向性としてこの審議会で論議して答申をいただく。個々の学校において答申にあるからすぐにということではなく、統廃合等について、3年前例えば備中中の時の意見を受けてこの審議会を開催しているという経緯があり、(統廃合の話)スタートが2年前の5月頃であった。それで急にという話になったので、最低三年前位から審議会等で一定の基準や考え方をいただいておいて、地元の方と協議会等開いてしっかり議論し、論議は統廃合ありきからスタートするのではなく、子供達の教育を今後どうするのかというところを中心に話す。例えばそのような形で(この審議会で)委員に議論いただき、方向性を出していただく、具体的にはその後もう一段階あるというのが基本であろうと思っている。

委員：平成20年からずっと減っている。国も県も減っていることを放置していた。地方から改革していくといったことをすすめてほしい。

会長：経緯を見ていくと小学校は二クラスが続いていくと警告ということで、地域へ行って3年位前から子供達の将来をどうするかを協議する。広い選択肢の中で考えていいだらう。あくまで子供を中心としてそれを考えていく。その一つの目安になる基準というものを審議会で作り、答申する。統廃合することになれば、地域に行って協議会を起こして、地域の皆さんと話し合いをしていく。子供、保護者の意見を聞いてみる。地域のみんなの意見を聞いて少なくともそのような中でコンセンサスを得ていく。理解をいただいた上ですすめていく。そのようなことが今大切な事ではないか。大切にしていければと思っている。

委員：会議の中身を地元へどうフィードバックするか、また吸収していくかという形の中ではそのあたりは審議委員へまかせていくということか。

会長：パブリックコメントではないが、地域へ出向き説明する。中間まとめができたら地域へ行って説明会をする。地域の意見を入れた上で基準を作っていく。委員が発言したからそのまま反映するのではなく、意見はいまだくが、それを地域へフィードバックする。

委員：子供の教育のために、保護者は子供を地域の学校へという人もあれば、子供のためならいう人もいる。

地域で子供を育てるというのは難しい感がある。中学校はそのまま地元にあってほしい。ではどうするかということになるが、中学校を全寮制にいけばいいのではないか。

委員：旧備中中学校の遠い子は片道1時間かかる。体調が悪かったからかもしれないが、疲れが見える。中学生は片道1時間位が目途なのかなと思う。小学生は分からぬ。時間的なことも考慮する必要がある。

会長：文部科学省の手引きを見ると、統廃合するとしても小学校は4km以内中学校は6km以内という一つの基準を作っている。これは原則である。通学時間は1時間以内である。

再編統合となると、通学の問題がある。今委員が言われたような通学時間の問題も当然出てくると思う。

委員：人数が少なくなってきた中で、非常に難しい地域の問題とか教員の配置の問題などあると思う。多いか少ないか多いのがよいのか少ないのがよいのかという議論もある。だからメリット、デメリットというのがあるのだが、なかなか難しい問題である。具体的なことは、これから審議していく上で、皆さんの意見を聞きながら考えていこうと思っている。

副会長：____委員は、会長が言われた小学校なら二クラス、中学校なら入学者が5、6人になるようになつたらなどの基準や目安があるなら、それをこの審議会で調整できるのかというようなことを言われたのだと思う。教育長はそれをはっきり言われなかつたが、それ（基準や目安）はあるのか。

教育長：基準があるわけではない。中学校の時は状況や基準とかではなく、少なくなるからこの学校とこの学校というように、小学校も一つ一つ対応して話し合ってみたら、結果的に全部1クラスか2クラスになつていた。1回目に基準があつたのかと聞く人もいたが、それにに対する答えとしては、学校は1クラスや2クラスになつたら0人の学年が2つ以上あつたわけなので、そのくらいになつたら統合していたようです。中学校であれば、一桁位の人数が続くようになってきたら、備中中学校の場合であるがあるとしている。これから先論議をしていく中で、ただ議論するだけではまとまらないと思う。一応たたき台というような物を事務局の方から将来的に出させてもらうことはあるだろうと思っている。今の時点で基準というようなものはない。

会長：古い話になるが、（昭和）59年の再編審議会の時基準を出していたか。

教育長：基準はない。この学校とこの学校をここへ持つていこうというような話をしている。

その後それぞれの学区について協議会等をかなり多くの回数開催している。その後議決という形をとっている。

会長：子供、保護者、地域に理解されるような形で統廃合というのは話をしていかなければならぬ。小学校15校全て回ったが、素晴らしい学校ばかりである。地域の中で学校が育てられてきた。地域の方が言っていたのは、学校がなくなつたらどんなことになるのかという思いがひしひしと伝わってきた。子供の事も考えながらどうしていくのか。一つの基準にそつて、警告ランプが鳴つたらそれから先はどうするかというと、今度は地域で協議会を作り、徹底的に話し合いをしていく。コンセンサスを得た段階で再編に踏み切っていく。選択

肢は色々ある。休校にしてもよい。また開校することも有りうるだろう。子供一人でもやつていくというような極論の意見も出てくるかもしれない。地域が学校を支えていく、地域が学校を育てていくというような考え方として文部科学省が提唱しているコミュニティ・スクールというのがある。地域が学校を運営していく、地域の方が委員となり、その発言権は非常に強い。教員の人事も地域の方の意見で動いていくようなコミュニティ・スクールというのがある。文部科学省はどんどん作りなさいというようなことを言っている。また、小学校と中学校と一緒にしていく義務教育学校（小中一貫学校）というのが昨年の4月から設置してもいいというように文部科学省が法令を改正した。今の時代は様々な学校があり、子供達の選択肢が非常に多い。どのような学校に行くかを選ぶ時代である。今日も全寮制の話が出たが、そういう話もあってよいと思う。

経緯を見ると、小学校は2クラスになったらどうも危ないとなっているが、2クラスというと教員の数は何人になるか。

学校教育課長：2クラスであれば小学校は校長教員数が3名、中学校は6名である。

会長：教頭は入らないのか。

教育長：教頭、事務、養護教諭もいない。

会長：校長以外2人の教諭のみとなり、それでよいかということになる。これば後日みなさんで議論させていただきたい。中学校は、入学者が一桁になってくると警告が出てくるということで今まで來ているようだ。

宇治小学校長：小規模校のメリット・デメリットについて発表

メリット

小規模校

- ・指示が通る。
- ・黙っていては授業にならないため、必ず発表しなければならない。
- ・物はふんだんに使え、教育効果が上がる。
- ・1人1役ある状況が生まれる。この子にあった形で1人1役させてやれる。
- ・個別指導ができる。
- ・事務処理が少なくて済むため、子供と向き合う時間が多くなる。
- ・全職員が全児童の事が分かるため、担任が見落としていることも、他の先生が見てくれていることもある。

大規模校

- ・クラス対抗という意識が出る。
- ・授業の中で多様な意見に触れることができる。
- ・教員の仕事の分担ができる。教員のレベルアップにつながる。

デメリット

小規模校

- ・音楽で合奏という醍醐味にはならない。きれいな音を出してくれても、迫力が出ない。
- ・意見交換できない。→合同学習を行う。
- ・担任の努力によって解消することができる。

大規模校

- ・おとなしい子にはなかなか目がいかない。
- ・合奏などの醍醐味に触れるチャンスはあるが、歌を歌わなくとも成立する。

- ・いじめが起こった場合、逃げ場があるがクラス全員が敵になる可能性がある。

成羽中学校長：小規模校のメリット・デメリットについて発表

備中中学校と統合した成羽中学校は、4月当初お互い遠慮や気遣いがあり、なかなか打ち解けることができなかつたが、遠慮が親しみに変わり交流の輪が広がつていった。不安や不満、ストレス、いろいろ、憂鬱、寂しさ学校に着いたらすぐに帰りたいというような生徒もいたが、日がたてば親や教員が心配しているほどでもなく、やはり子供であるというように感じているところである。

保護者に会うと、（子供は）元気をしている。心配していたが、今は楽しく行っているという話をしてくれた。

先生方の意見：

- ・クラス替えが可能となり、固定化していた人間関係を改善することができた。
- ・教材教具が量的に充実した。
- ・体育館の改修、倉庫の新設など施設面が改善された。
- ・財政面で有効化、効率化できた。
- ・学校行事などにおいて、学級間で良い意味の競争心が生まれた。
- ・部活動で人数が増えたことで活気が出てきた。
- ・2、3年生は各2クラスとなったので、教員1人当たりの生徒数が少なくなり、目が届きやすくなつた。
- ・教科ごとの教員数が多くなつたため、指導上の悩みや指導力向上のための研修もできるようになつた。

教育は人なりの人にスポットが当たつてゐるというように思う。

同じメリット・デメリットであつても、個人や個人の特性によつては普通はメリットとなる事がデメリットとなることもあるし、デメリットとなることがメリットとなることもあるので難しいところがある。

デメリットを挙げるとすれば、通学時間、距離である。長いので、疲れが見える子がいる。通学途上の地理的状況、通学途中の気象なども心配である。

生徒の意見：

- ・ごく普通に過ごしている。以前と変わりない。自分は自分である。
- ・クラスが2クラスになってよかつた。交友関係が広がつた。自分自身が見えなかつた所が見えてきた。
- ・受け入れられて溶け込んでいるので幸せだ。充実した日が送れているからか、備中の時の懐かしい話も出る。
- ・あと1年だから大人しくしておこう。

ただし、皆が同じ気持ちでいる訳ではない。

会長：今の発表に対して質問はないか。

委員：大人になってから、大規模の方がよかつた小規模だったからよかつたというのはあるか。

宇治小学校長：それはないように思う。

委員：校務員が小規模校はいないので、教頭が校務員の仕事もする。校務員の配置の基準を下げてもらえば先生の負担も減ると思う。

宇治小学校長：週1日だが、臨時の校務員が来てくれている。

学校教育課長：兼務で宇治小学校、福地小学校に配置している。

教育長：文部科学省の標準法で決まっており、自動的に配置される。

委員：環境整備が一番の問題である。校務員を配置してほしい。

委員：(学校へ)奉仕作業に行くのだが、人数によるので少なくなると大変になる。人数というより、世帯数で考えてもらった方がよい。使用する人がやっていかなければと思う。

会長：次回は小規模校をどのように活かしていくか。魅力づくりというテーマで議論させていただく。

7. その他

次回審議会は、7月26日水曜日で予定をさせていただいている。調整の上後日案内させていただくので、よろしくお願ひしたい。

8. 閉会（川上副会長）

第2回目の審議会にお集まりいただき感謝申し上げる。冒頭会長からどしどし意見をいただきたいということであつたという間に二時間が経過し、有意義な会議となった。

次回7月26日は、具体的に再編の中身等について審議する計画となっている。先ほど話した小規模校をどのように活かしていくかというようなことを審議してもらうようになっているので、よろしくお願ひしたい。